慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』(巻五)解題・翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2010
Jtitle	三田國文 No.51 (2010. 6) ,p.33- 52
JaLC DOI	10.14991/002.20100600-0033
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20100600-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』（巻五）解題・翻刻

辻　英子

「源氏目録巻之五　宇治十帖」は「一　橋姫（はしひめ）　うはそく共いふ」から「十　夢のうきはし　法の師共いふ」までとなっている。「巻之五」には、製本の際に生じたと見られる綴じ違えがある。例えば、

1　「山里いかにとおもいやりて」（3ウ10）の文は「此宮へおもひたちてまいる道から」（8オ1）に続く（一　橋姫）。

2　「いとめてたしそのことは」（19ウ9・10）の文は、「ひとりとゝまる」（4オ1）に続く（四　早蕨）。

3　「秋はつる野へのけしきもしのすゝき」（7ウ10）の歌は、「ほのめく風につけてこそしれ」（20オ1）に続く（五　寄木）。

掲出にあたっては、原本どおりに写した。

バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』詞書

源氏目録巻之五　宇治十帖

一　橋姫（はしひめ）　うはそく共いふ　二　椎（しゐ）かもと

二（三ノ誤写）　あけまき　四　さわらひ　親　三

五　やとり木　六　あつまや

七　うき舟　八　かけろふ

九　手ならひ　十　夢のうきはし　法の師共いふ　（1オ）

（遊び紙）　（1ウ）

宇治十帖

一　橋姫（うはそくの巻共いふ）

此巻はし姫と云事かほる大将の哥に（「一ノ①」起）

はし姫のこゝろをくみてたかせさす

さほのしつくに袖そぬれぬる111

是も宇治のはしひめの本説有又うはそくといふ事宇治にふるき宮すみ給ふ此宮は桐壺（きりつぼ）の御門の八の宮けんしには御おとゝそかしれいせんゐん御くらゐのおり朱雀院（しゅじゃくゐん）の御はゝあしきささきよきさま（2オ）におもほしかまへて此八の宮を御くらゐにたてまつらはやなとのくはたての

有けり御心かまへやもれけん源氏などの
御心よからすおもひ奉りてよにをしけ
されておはしけるか八条に御家有て
すませ給ふ此八てうの御家さへやけにし
後はいと浅ましく都のすまゐもむつかし
くおほして宇治に山里もち給へりけ
る所にうつりすませ給ふそれより宇
治のみやと申すやかて御くしなとおろ（2ウ）
してすみ給ふいとうつくしきひめ君
二人もちたてまつり給へり見すてかた
くおほしてそくなからをこなはせ給ふ大
かた此宮は諸道のたつしやにておはし
けるほとにかほる大将とくゐ参りて物
なとならひたて奉りなつかしくお
もひたてまつりてかよひし程にひめ
君たちにもおもふ心有てはしひめの哥
もよめるなり此姫君たちの母君は大臣
の御むすめにておはせしかいもうとの（3オ）
君うみたてまつりてやかてはかなく
ならせ給ふ其まゝ宮はひしりにてそ
くなからをこなひ給ふひしりといふ
事ありともあらかふへからす此巻に
有明の月をまねくといひてよろつのや
さしくおもしろき事することありか
ほる大将そのころはさいしやうの中将に
ておはしけるか此姫君たちをいかにし
てなとゆかしくおもふほとにふかきあ
きはまして山里いかにとおもひやりて
（3ウ）（錯簡）（「一ノ①」結。「8オ1」ニ続ク）
ひとりとゝまる　ふるさとはなるゝ
（承「19ウ10」）（「四ノ②」起）
さわらひ　峯の霞の立を見捨る
都へいつる
なと云事つくへし　めてたく　心ゆき
又ふるさとの名残のおしき心ねをつくへし
うち川うれしきせ
なといふ事も
あるへ
し
（4オ）
〔絵四〕（4ウ）（錯簡）（「四ノ②」結）

五　寄木（やとりき）

此巻やとり木といふ事かほるのうちのふる（五ノ①起）
き宮にてよみ給ひし
やとり木とおもひ出すはこのもとの
たひねもいかにさひしからまし117
といふ哥の故なり此心はうちの大君うせ
たまひて後とし月ふれともかほる大将

なけき忘れたまはす中の君はにほふ
宮の北のかたになりて京におはし
ませは宇治の宮いとあれはてゝなと（5オ）
おほしてかのみやのきたのかたにおほせあ
はせて寺（てら）になしてかたはらにしんてん
を立て時々わたりおはしましてかのむ
かしの事かたり聞せし弁の君もひめ
君にわかれ奉りてあまになりてしを
爰の宿もりになし給ふにおはしまし
て御らんしめくらして日もくれねれは
とゝまり給ひてよみ給ひしなりさて
このまきにほふ宮は夕きりのおとゝの
御むすめ六の宮におとゝをしたち（5ウ）
合せ聞え給て時めかせ給宮はかの中の
君をかきりなくおほしめしていつしか
物をとはせん事をかなしく心より外
になけき給ふにたゝならすさへなり
給ふ八月はかりより夕きりの御かたへお
はしますか返々も山ちわけ出けん程
の心かろさ人やりならすくやしく
おほししつみてけにあまもつりする
事（ママ）なる御枕をそはたてゝなかめ出し
給へは有明の月もやう〳〵すみのほり（6オ）
つゝひやゝかなる風のをとむしのこゑ〳〵
にもむかしのあさましかりし山さとの
すまゐより物うくてよみ給ひし
山さとの松のかけにもかくはかり
身にしむ秋の風はなかりき118
とよみ給ひしなりあさましかりし山
里のすまゐよりはみやこはすみうきな
といふ事物のうらめしきにほひにと
り合せて付させ給ふへしさるほとに宮
かやうに夕きりのおとゝにかよはせ給ふ（6ウ）
ひまにかほる大将にての事なれはかの
中将の君をは御このことくおほしたる
事なれはつねに此宮へもおはしかよ
ひ給ふ世中のうらめしき物かたりなとし
てふくるまておはしていかゝ有けん
まことはしらねともはひよりして
れいのうつり香しみふかきを宮とかめ
いてゝうらみ給ふうちとけて心やすき
かたなれは宮ものとかにおはしまして
ふかき秋のあはれは物ことにもよほされ（7オ）
てなみたの露ふきむすふおはなの物よ
りことにさし出してうちまねくを御
覧して宮なつかしき程の御ひたゝれはか
りき給ひて御ひはをわさとならして
黄鐘調（わうしきちてう）のしらへひきすさひ給ひてよみし
うた
ほに出ぬ物おもふらししのすゝき

まねくたもとの露しけくして119
女君の御返事
秋はつる野へのけしきもしのすゝき
（120）（7ウ）（錯簡）（「五ノ①」結「20オ1」ニ続ク）
此宮へおもひたちてまいる道すから山ふかく
（錯簡）（「一ノ②」起）（承「3ウ10」）
なるまゝに風のをとひやゝかに物さひし
くなにとなく袖もいたくぬれて
山おろしにたへぬこのはの露よりも
あやなくもろきわかなみたかな112
なとくちすさひ給て馬にて入給ふ
ほとにちかくなるまゝに物のをとかすか
に聞ゆわさとの御あそひにはあらす黄鐘調にしらへてひきすさひたるばちを
とたえ〳〵に聞ゆしやうのことといとね（8オ）
たくおもしろくて川なみのひゝき松
の風おりにあひたる心ちして馬ひき
とめて聞給へは此宮に姫君たちのあそ
ひ給ふなるへしやをら入てとのゐ人に
尋給へは宮は宇治山のおくにあしやり
とてたつときひしりあり四きにあ
てゝねんふつをつとめに此はうへのほり
給ふおりふしなれは御留主にていとか
すかなり此とのゐ人に心をあはせて
のそき給へはいとあはれにすこけに（8ウ）
てみすたかく巻あけてはしらかくれ
にゐかくれてはちを手まさくりにし
て雲かくれたる月をさしのそきて
此巻の名句也あふきなくてもまねくへかり
けりとの給へは今一人はことのうへにかた
ふきかゝりて
陵王入日をかへしゝ事をよそへしなり
入日をまねくともいへさまことにもとて
うちわらひなとしたるけしきとも
いひしらすけたかくうつくしく身に（9オ）
しむはかりおもふ取わけあふきならての
おもかけはまことしくおもひしみてあか
つきかへりけり宇治といふには
山かさなれるすまゐ
みやこよりうちへ入事
四のを　はち
ありあけまねく　とのゐ人
さほのしつく　川なみたかく
なと云事有へし扨も此巻に弁の君
といひし女房は此かほるのまことの御ちゝ（9ウ）
ゐもんのかみのめのとこなり世をとろへ
て西国の受領の妻に成たりしか後に都
へのほりてこの宮に姫君たちの御うし
ろみにてさふらひけりひめ君たちの御
母かたにすこしもはなれさりしゆへなり

扨この宮にてかほる此へんの君此宰相の
中将しのひてたいめんしてむかしの
事共をかたりきかすいとあはれにふし
きにおもひて此弁の君をも後まて
かほるはこくみ給ふかのゐもんのかみいま（10オ）
はのきはにいかにとして此宮へたてま
つらんとて弁の君めのとこなれはいひ
をきし事有とてとり出してかほるに
たてまつる唐の浮泉綾にてぬひたる
袋の中にたまさかにかよひし文の返
事五六まひはかの手にてかきたる文
のありいかならむよにかたてまつる
へきとおもふにあひたてまつるうれ
しさよとてたてまつりとりて見た
まへはふうつきたるうへに上といふもじか（10ウ）
きたりあくるもめつらかにおそろしく
て御らんすれは大納言の手は鳥のあと
のやうにてかの君の生れ給へるゆかし
くかなしき事宮の御さまかへたる事
のあへなく口おしき事ともをこま〳〵
とかきたりけにしゆせきは千年の
かたみにやといひしらす哀にてとり
てかへりしなりかやうの事をとりあは
せて宇治にて聞し身のはし姫といふ
やうの句をは付させ給ふへし（11オ）

〔絵一〕（11ウ）（錯簡）（「一ノ②」結）

二　椎か本

此巻しゐかもとゝ云事かほるの哥に
　たちよらんかけとたのみしゐかもと
　むなしきとこになりにけるかな113
といふ哥のゆへなり此うはそくかくれ給
はん程近くなりてかほるれいの宇治へ
まうて給ふに宮いつよりも物あはれなる
御心ちしてれいの四きの御念仏に山へ入
たまはんとにや姫君たちにも物の給ひ
をきなとし給ふにかほるも都へはいまた（12オ）
入たらぬ秋のけしきをとはの山も色
付て猶たつねきにけりなとなかめ
ておはしたるに宮はまちよろこひ給
ひてなからむあとの事姫君なとの
事かす〳〵申をき給ひてそのまゝ対
面もなくてむなしく成給ひし事あ
かすかなしき我も老とけはかならすお
なしいほりになとちきり給ひし事
おもひ出て宇治の宮のいつしかかくれた
まひて後あれたるを御らんしてしゐか（12ウ）
もとの哥をはよみしなりしゐかもと
宇治のわかれなと云事あらはさとり
あはせて付させ給ふへし宮かくれ給ふ

事は秋なり又宇治の中やとはつせ
まうてなと云事あらは此巻の二月廿
日ころなるへしにほふ兵部卿の宮此うは
そくの宮にかほる大将まいりかよひ又姫
君たちをも心にくきさまに物かたり申
をき給ひしほとに人しれすゆかしく
おほしてにはかにはつせへまいり給ふお（13オ）
ほくは宇治の中やとりのゆかしけれはなる
へし扨此姫君たちの御かたへも御心かけ
給ひしかとも人めしけく京よりむかひ
の人々とも参りあひしかはつゐにかな
はてかへり給ふ宇治の中やとりとは十帖の
中にあまた所あるか是よりはしまり
て中やとはみゆはつせまいりも
あまたあり此巻
より
はし
まる（13ウ）

〔絵二〕（14オ）

三　総角（あげまき）

此巻あけまきと云事かほるの哥に
大君によみてたてまつりしなり
あけまきになかきちきりをむすひこめ
おなし所によりもあはなん114
といふ哥のゆへなりよめる心はうはそくの
みやの一めくりの御仏事姫君たちいとな
み給ふかほるも事くはへむとてわたり
給ひてよみし也返事あね君
ぬきもあへすもろきなみたの玉のをに（14ウ）
なかきちきりをいかゝむすはん115
との給ひてつゐに心つよくてうせ給ひし
なり御いもうとの君をも心かけての給ひ
しかともあね君をふかく心かけてうけひ
かすあるとき文のかへり事すこしゆるく
やうなりしかはおとこのかたは心やすく
ておはしたるに中の君と一ところに
ね給ひておとこの影のしけれはなへたる
一ゐはかりき給ひてあね君かくれ給ふと
とまり給ふ中の君にいひよりたれとも（15オ）
あらさりけれはいとめつらかにうらめし
くてなにとなくかたらひをきてかへり
給ふ匂兵部卿の宮に中たちしてあ
ひ奉りて後には二条院のにしのたいへ
むかへさせ給ひてわか君なとまうけ奉り
しなり扨宮は御らんしはしめていと
いろなる御心にてしは〳〵宇治へかよは
せ給ふほとに御母きさきみかとなと聞
給ひて此みやをはすちことにおもひ
奉り給ふ宮なれはかろ〳〵しく山ふみ（15ウ）

をいさめたてまつりたまふて御心に
つく人あらはむかへ給ひて御覧せよなと
との給ひて御心にまかせぬ姉宮は
さはおもひし事なりといひしらす心
ほそく是をのみなけきくらし給ふに
御心ちもなにとなくなやましくお
はしませは此つゐてになくなりなん
とのみふかくおもひ立給ふかくてにほふ
宮は御心もあくかれはてゝいかにしてかと
おもひ給へとはるけき道なれはする〳〵（16オ）
ともおもひ立給はす秋ふかきころなれは
もみち御らんせんと出立給ふも宇治へおは
しまさんの御心なり舟ともかさりてぶ
かくとゝのへてあそひ給ふ宮は御あそひ
に御心もいらす御中やとりにのみな
かめやられ給ふかの宮にもさりともけ
ふのつゐてに有なんその上みちし
はのかほるのかたより心し給へとの給ひ
をくりけれは人しれすしたまち給ひて
このしたかきはらひし庭のくちはとら（16ウ）
せみすかけかへ給ふに内より大宮のつかひ
とて上達部宮（かんたちめ）の大臣なとたてまつ
りてかろ〳〵しき御ありき人すくな
にてよのためしになりぬへしなと
あれはことわつらはしくて心ならす
むなしく帰給ふさこそおはしつらん
と心くるしけにおとことい ふ物はかく
こそ有けめとわれもよにあらましか
はつゐにはかゝるへしとふかく姉きみ
おほしめし取ていとゝ御心ちもよは〳〵（17オ）
しくなりもてゆきてかほる大将殿おはし
ましたるに此中の君をたゝわかみと
おもひて見奉り給へと返々いひをきて
御年二十六にてかくれ給ふ大将はかきり
なくおもひてすてに御いみにこもりて
みやこへもかへり給はすおほろけの事に
はあらしとかた〳〵より御とふらひあり
比は冬なれはいとゝ山里さひしくふ
りつむ雪にあとつけわひてかたし
く袖の氷とけさりしおもかけにいとゝ（17ウ）
なけきくはへ給ふかやうの事をつくへし
あけまき心つよかりしなけきなとも
ことよせて付へしふねのかくまちかき
ほとにてかへりしなと云事あるへし
これらは　うち山　うち川　もみち
なと付へ
し（18オ）

〔絵三〕（18ウ）

四　早蕨（さわらび）

此巻さわらひと云事うはそくの宮のた（「四ノ①」起）
のみおほして念仏なとにもこもり今
はのおりもおはしましたりしひし
りのはうより中の君姉君にをく
れてたゝひとりなかめおはしましゝ
所へはるのはしめにわらひつく〳〵し
おかしけなるかこに入てたてまつる
とて

　この春はたれにか見せんなき人の（19オ）
　かたみにつめるみねのさわらひ116

とよめり中の君は春のひかりを見給ふ
に春やむかしのとたとられてわか身ひ
とりを恨み給ふいそのかみふりにし宮の
うくひすに春となつけそとなけき
給ふ此宮のうせ給ひしもやゝたちま
さりて姉宮のなけきをかなしひ給ふ
さて此巻の二月ににほふ兵部卿の宮へ
むかへられ給ひていとめてたしその
ことは（19ウ）（錯簡）（「四ノ①」結。「4オ1」ニ続ク）

　ほのめく風につけてこそしれ120（「五ノ②」起）

とよみ給ひしなりさて女君にもしやうの
ことすゝめてひかせ奉り給ふか様の事
をことはにとりてつくへしすてに都
にゐたまひつる時の事なれは心うつ
くしかほる大将の近つきよりし時かの中
の君たゝならすおはしけれはおひのてに
あたりたりし事有是はしるしのおひ
のことてにあたるこれも宮ゆふきり
のおとゝのかたへおはします須磨のあさ（20オ）
ほらけにおもふ心しあれはかほる朝かほの
花をおりてあふきの上にをきて御物
かたりのまにあかみゆくを見て哥此
哥の心はあね君のさしもゆいこんに
したまひし物をたてまつらすなり
ゆきくやしき心ねならんかし

　よそへてそしるへかりけりしら露の
　ちきりかをきしあさかほの花121

とよみたりし也あさかほあふきなと
これらはかほると云事にたよりて有（20ウ）
かやうにかほるしは〳〵いひわたり給ふ
御むつかしくわつらはしくおほしめし
ていかゝしてかのかれましとおもひめく
らして其ころひたちのかみといひし
すゆりやうのめはこの中の君なとの御
はゝの御めいなり中将の君とて宮つか
へしか北のかた失（うせ）給て後うはそくの宮
時々御らんしけるにやたゝならす成しかは
宮かきりなくくやしくおほしてありし
事のやうにもあらすおほしめしてすて（21オ）

させ給ひけれはうらめしくはつかしく
おほしていてゝすりやうのめになるいひ
しらすうつくしき姫君をうみ奉りて
母人しれすおもひかしつきてその後か
みのことも共いてきたるにもゆめ〳〵
をとらすもてなしゆく年月ふる
ほとに廾はかりにも成給ふいかにし
てちゝ宮の御かたへしらせ奉らんと思ひ
て此北のかたあひよりてかくと申し
をおほし出て故大きみのかたみに（21ウ）
是をたてまつらんと大将にかたり出
させ給ひける大将もさもとおほしける
か哥に

　みしひとのかたしろならは身にそへて
　こひしきせゝのなてものにせん122

とよみしかはあかてわかれたるかた
みなとの句に付へし扨大将はたうた
いの姫君女三の宮をたまはりていかは
かりのめんほくにかあらんされ共なき人
の事をわすれす宇治へおはしたれは（22オ）
此ひめ君はつせまいりけるかうちに
中やとりしてかの弁のあまにしるへ
きたよりなれはやとりて物かたりなと
するを大将の小君に心をあはせての
そきて見たまへはいにしへのひめ君
にもいたくおほえ宮の北のかたにも
にたてまつりたれは心おこりして
つゐにあふ此人の事そかしあつまや
にもうき舟にも手ならひの君にも
これらは宇治の中やとりはつせまうて（22ウ）
かたみなとの事宇治にてあるへし
宇治十帖の中にきくのかけ物の碁と
いふ事は此巻にかほるを大やけの御
むこにとり給はんとてよのそしり
をおほして女二の宮の御かたの菊え
ならすおもしろき夕はへに殿上にた
れかあると御尋あれはたれかしかれかし
なと申中に其ころかほる中納言な
りとり別めし出してかのきくをかけ
物にて御碁うたせ給ふ宇治の御かたまけ（23オ）
させ給ひてまつ一えたゆるすとのたま
ひしかは中納言心しておりて

　よのつねのかきねにさける花ならは
　こゝろのまゝにおりて見ましを123

と申されしかはうちの御かた母女御おは
しまさねともとのたまひしなり

　霜にあへすかれにしそのゝきくなれと
　のこりの色はあせすもあるかな124

とおほせられてむこにとり給ふかくて
忍ひ〳〵まいり給ふ心やすきとにや（23ウ）

次のとしの藤のさかりに藤つほにて藤
の宴し給ひてやかてその夜大将の御もと
へ宮うつろはせ給ふなりその夜の笛に
てかのゑもんのかみの　つたへし笛を
大将　ふける　なり

〔絵五〕（24ウ）（「五ノ②」結）

（24オ）

六　四阿屋（あつまや）

此巻をあつまやと云事かほるの哥に
さしとむるむくらやしけきあつまやの
あまりほとふるあまそゝきかな125
といふ哥のゆへなりこれらはみやの北の
かたかほるにかたり出し給ひたりしひ
めきみを母さこんの少将と云人をすてに
むこにとらんとせしそかしそれをひた
ちのかみ聞つけていもうとゝつけてい
とよきむことおもひてやらんわか姫に（25オ）
ひきこしてむこにとるいと口おしくお
ほして宮の北のかたの御もとへつけてゆ
きてあつけ聞ゆ此北のかた御ゆとのゝま
に宮さしのそかせ給ひてとかくいひよ
り給ひしほとにめのとあさましく
おほえてあら〳〵しき小いゑをもちたる
所にかくしをきぬさて大将殿宇治へ
おはしてかの弁のあまをまつやり
たまひて我もかの三条のたひ所へ
おはしたりとのゐ人東（あつま）こゑにてた（25ウ）
そやなとのゝしりとかめしその時の
哥なりかくてそのあかつきわか御車
にのせて宇治へつれておはしてす
ませ給ふたひのいゑなとゝ云事には
むくらあまそゝきあつまやとのゐ
人なと云事付へしあめすこしふり
たりしなり比は九月なりさて大将
はしは〳〵宇治へかよはせ　給ふ

（26オ）

〔絵六〕（26ウ）

七　浮舟（うきふね）

此巻うき舟と云事うき舟の哥に
たちはなのこしまの色はかはらしを
このうきふねそゆくゑしられぬ126
といふ哥なり此ゆへはあつまやの君をか
ほるいさなひて宇治にとりをきてと
き〳〵かよひしほとに兵部卿のみや

かの北の御遊のまにほのかに見給ひし
人をいかなる人やらんと忘れかたき秋の夕
くれにて北のかたにもとひたてまつ（27オ）
り給へはとかくいひまきらはしてすき
ゆく又のとしの正月に宮此御かたへおはし
ましてうちとけておはしますに宇治
よりとてうつえひけこまつに付て文
をとりそへて御まへなるわらはもちて
まいりたり宮いつくよりの文にかと
てうたかはしさにとりて御らんすれは
いとわかやかなる女の手なりあやしく
おほす大将こそ宇治へつねにかよひ
給へいかならむと心にかけて御いゑ人くはし（27ウ）
くたつね給へはしか〳〵と申ありし
御ゆするのまにほの見たまひし秋の
夕おほしあはする事共ありてしのひ
て出給ふまつほそきあなよりのそき
て御らんすれはわかきたのかたにもおほ
えたり人しつまりて後大将のおはしまし
たるまねをしてみちにていみしく
はちかましき事あり返々人にしらす
ましとさゝやかせ給ふ御こゑいとよくまぬ（ママ）
ひ給ふぬれしめりたる御にほひなとも（28オ）
まかふへくもなし右近と云女房出てつ
かうまつる扨きちやうの内へ入てもたゝ
大将のおはしたるとおもひてうちと
けぬれはあらぬ人なり浅ましくおほ
しめせともかひそなきにほふもかほり
もおもひもわかぬちきりとは是なり
あかつきかへらむとおほしつれともさら
にたちはなれかたくまことにしぬへく
おほしまよひて御みをすてゝ其日は
とゝまり給ふそのおりこそうこんは（28ウ）
しりてあきれ浅ましくおもへとも夜
はたゝあけに明ぬれはかなはすさま〳〵
おそろしき事ともをかまへて右近そ
のへやりける扨心しつかにとゝまりて
あさからぬ御ことはをつきせす時の
まも見すはいかゝせんとあくかれ給へ
は女もおもふとはこれをいふにやとお
ほしていよ〳〵そらおそろしくかな
しけれともうちなひきなとせしそ
のほとのあさからぬ御ちきりおもひや（29オ）
るへしさて次のあかつきせんかたなく
かなしひなからをのかきぬ〳〵ひやゝかに
風のをともいとあらましくしもふかき
におきわかれ給ふ御馬にてかへり給ふ
そのおり宮の御哥
よにしらすまとふへきかなさきにたつ
なみたもみちをかきくらしつゝ127

うき舟御返事
　なみたをもほとなき袖にせきかねて
　いかにわかれをとゝむへき身そ128（29ウ）
なといひかはし給ふおもひわかぬ事な
とにはつくへし人たかへなと付へしかく
ても猶こひしきはせんかたなくなにと
すへきやうなくてみや御物いみなにや
かやとかこつけて又しのひて出給ふこゝ
の人めもさすかにて川よりをちに御
やとをとり給ひてちいさき舟にのり
給ひてさしわたすにはるかなるきしに
こきはなれたらん心ちしていと心ほ
そく有明の月のすみのほりて水のお（30オ）
もてくもりなきにこれなんたちはなの
小嶋と申て御舟さしとゝめたるをみ
給へは大やかなる岩のさましてされたる
ときは木のかけしけれりかれ見たまへ
千年をふへきみとりのふかさをとのた
まひて宮
　としふともかはらし物かたちはなの
　小しまのさきにちきるこゝろは129
とのたまひし返事そかし哥の故也
扨こそ此うき舟の君なともいひけれ（30ウ）
さて舟よりいたきおろさせ給ひて御
やとりにて御心しつかにおはしてあ
やしきすゝりめして御ゑなとかきす
さひて女男もろともにうちそひたる
をかきてつねにかくてあらはやと
御なみたをうけての給ひし御おも
かけいとさこそ忘れかたくありけめ
此いゑにあしろ屏風をたてたりそ
のことは
　すゝり　ゑ　やと（31オ）
　川よりをち　あしろ屏風
是みな宇治の川よりをちなといふ事
につくへしその後又かほる大将おはし
ましたりそらはつかしくかなしく
てうちしめりてねたるを大将はまと
をなるをさらぬやうにてうらむるに
こそと心くるしくてこよなくもて
つけたるかなといとゝ心まさりして
あはれもふかくおほしてもろともに
はし近く出給ひておりふしなくさめ（31ウ）
給ふかほるの哥
　宇治はしのなかきちきりはくちせしを
　あやふむかたにこゝろさはくな130
とよみしなりかくて二三日してかへり
給ふにもおもかけこひしくおもふにいとお
こかましくさて宮より御心あくかれて
れいならすさへおはしけり御文のかよひ

もところせきほとなり大将の御使
と宮の御つかひとたひ〳〵行あひし
かはそれよりことあらはれて大将のかた（32オ）
よりとのゐ人すへなとしていときひし
くもてなすきゝあきらめて大将の
もとよりかの宮の御事うらみて
　なみこゆるころともしらすするゐの松
　まつらんとのみおもひけるかな131
と宇治への給ひをこしたる事あらは
れぬとおもひなけくさまいと心くるし
宮の御つかひのあらはれしおりの文の
色はさくらに付てあかきしきし也あ
らはるゝ事なとあらはさくらに付へし（32ウ）
なといふ文を付けへしさてうき舟お
もひみたれていかゝせんと身をうらみ
けるに宮おはして案内し給へとも
とのゐ人きひしくて内へも入奉らす
とかくいひて御つかひ右近にあひたり
出へきやうもなけれは侍従とて右近と
おなし心なる女房を宮のおはします
所へたてまつるに御ともの人のむまにの
せんとすれともえのらねはわかくつを
はかせてきぬのすそをとりて立そひて（33オ）
参る宮は御馬にてとをくたち給へる所
へつれてまいりあひて物の給はんとし
給ふ所にひんなけれは馬のあふりをし
きてをとろむくらのしけき山かつの
家の軒のしたにおろし奉りてなく
〳〵物のたまふにさとひたるいぬのこ
ゑ〳〵にをとなふも心ほそくおそろし
其ほとのことは
　山かつの軒のした　　さとひたるいぬ
　あふりしく（33ウ）
なといふ事をうき舟なとに付へし
扨なく〳〵宮かへらせ給ひぬ侍従御有さ
まをかたりけれは女きみまくらもう
くはかり也かくて大将人はなれたる所
にをきたれはこそ宮もおはしませ
とていそきむかへ奉らんとて御家つく
り給ふ宮はそれよりさきにむかへとり
て御心のまゝにとおほして御めのとの
いゐ九条あたりなる所へうつろはせなん
と人しれすかまへ給へは女はいかゝなり（34オ）
はつへき身にかとこかれ給ひてとにかくに
わか身をなき物になさはやとおもひな
りけりことはりなりやかはをと波の
こゑをきくにもわか身のをき所とあは
れにてうすきぬにはかまはかりき給ひ
て人のねたるまにつまとをしあけて
ゆくへきかたもしらす御かほに袖をゝし

あてゝよゝとなきてえんより足を
ふみおろして鬼にても神にてもわ
れをつれてゆけかしとなき給ひた（34ウ）
るにかの宮とおほしくおとこの直衣（なをし）
すかたなるか出きていらせ給へとて
かきいたきてゆくこれはこたまなり
とりもてゆくほとに平等院のうしろ
に大なる木の下に捨てたりしを小野
のあまはつせより下向に此平等院
にやとりたりけるか見つけてとり
て小野へゆきてやう〳〵かちしなをさ
せいたはりて人となし奉りて後こそ
あまになりしかされは宇治に木玉と（35オ）
いふ事もあるへし

木玉にとられし
ころは三月の
するの
事
なり
（35ウ）

〔絵七〕（36オ）

八　蜻蛉（かけろふ）

此巻かけろふと云事は此うき舟のあとか
たなくうせて後かほるよみ給ひしなり
かけろふのとひかふを見たまひて

ありと見て手にはとられすみれは又
ゆくゑもしらすきえしかけろふ132

とよみ給ひし故也扨うき舟からをたに
残さすあとはかなくなりしかは母のな
けきをしはかるへし人めも浅ましく
てのこしをきたりける御ふすまてう（36ウ）
となと取あつめてむかひの原にをく
りてゆくゑなきけふりとなしゝ也
かけろふと云事あらは

あとかたなき　水のあはときえし
のこるふすまや　けふりなるらん

なとゝ云事付へし宮はひたすらに此なけ
きにふししつませ給ふ侍従といひし女房
をこれを後には宮の御かたへよひ給ひて
御母中宮の御かたにさふらはせてこ
よなく御かたみに御らんしけり（37オ）

〔絵八〕（37ウ）

九　手習（てならひ）

此巻てならひと云事はうき舟小野
のあまにつれられて小野にすみけ
りあらぬよにむまれたる心ちして
たれにわか身の事をもふる里の

事をもいふへきなれはたゝつく〳〵
と手ならひをしてすゝりにむかひ
ておもふ事をも哥によみし也さて
この巻より手ならひの君と云心うへ
しをのゝあまのとりしはしめは此尼（あま）（38オ）
八十はかりなる母ひきつれてはせへま
いりて下向に宇治にやとり此あまの
あに山にたつときひしりにてある
もつれたりけるほとにうしろの木
の下にあやしき物ありなと人のゝし
るを行てみれはいとうつくしき
わかき女しきあやのうつりかもなへ
てならぬ赤きはかまきたり此あまは
せにてふしきの夢を見たりとて
此ひしりにかちせさせなとしてつ（38ウ）
れ行てもてなしいとをしみ給ひけ
るに此あまのむすめはかなくなり
たりしかかのむこむかしを忘れす
小野へつねにきけるか此人を見てむ
かしの御かはりにとしきりにいひわ
たりけるを聞給ひてむつかしき事
をおもひてあまの又はつせへまいり
たりけるまに山よりひしり下りた
まひたりけるにいひて尼になりけ
るかくてさま〳〵都の事ともおもひ（39オ）
出しつゝ身をなけんとて出たりし
に宮とおもひし人につれてゆくとみ
しより身のゆくすゑはしらすいかゝな
りけんと浅ましくおもひて哥に
身をなけしなみたの川のはやきせを
しからみかけてたれかとゝめし133
月のおもしろきにつく〳〵なかめて
こゝろには秋のゆふへをわかねとも
なかむる袖に露そみたるゝ134
秋ふかくなりゆけは大かたの空のけし（39ウ）
きもあはれなるにまして物おもふ袖
の上おもひやるへしすみ所はかの夕き
りの宮す所おはせし山里よりは今
すこしいりて山にかたかけたる家な
れは松かけしけく風のをともいと心ほ
そし門田のいねかるとてわかきをんな
とものうたひ物まねひしつゝひたひき
ならすも見しあつまちの心ちしてあ
はれなり月のあかき夜うちなかめて
われかくてうき世の中にめくるとも（40オ）
たれかはしらむ月のみやこに135
ことにふれつゝ宮の御おもかけの忘れぬ
もあさましさりとも忘れはて給はし
とおもふもいとあはれなり春にも成
ぬれはいとゝむかしのこひしくて

ねやのつまちかき紅梅の色もかもか
はらぬも春やむかしのとことはなよ
りもこれに心よせし
　袖ふれし人こそ見えね花のかの
　　それかとにほふ春のあけほの136（40ウ）
扨大しやうおもひかけぬゆかりに聞出し
給ひてたつね給ふ
　　小野には此哥の
　　ことはをおもひて
　　付
　　給ふへ
　　し
（41オ）

〔絵九〕（41ウ）

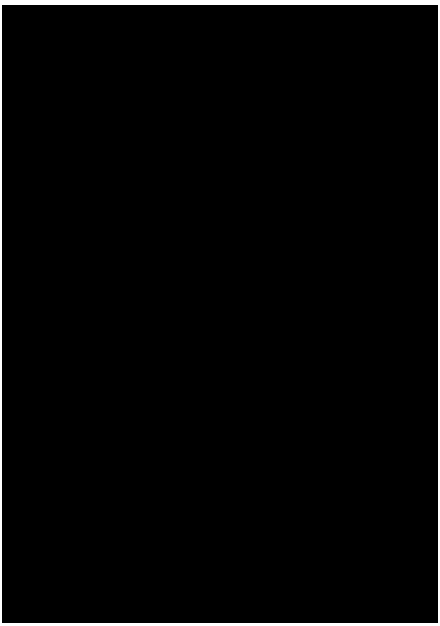
十　夢浮橋

此巻ゆめのうきはしと云事源氏わか
身いにしへの栄花をはしめ御身のさえ
もよにこえ品たかくむまれ給ひて御
かたちはひかるとさへいはれ給ひて御心
にいみしくおはせし事もたゝ智識
にして雲かくれ給ふ又か様にことはお
ほくつくりいたせは物かたりもはては
みな無常をしらせんためなれは夢の
うきはしとはいふなりはしをこと（42オ）
はのやすめに夢のうきはしとは云
りさて此巻に大将きゝいたし給ひて
此手ならひの君のおとゝひたちのかみか
子をむかしのなくさめにめし出して
つかはせ給ふを御つかひにて御文をつか
はさるゝしるへなくてはいかゝとてかの
人をあまになとせし僧都におほせて
文をこひて大将の御文にとりそへてゆき
しなり大将の御文に
　　法のしとたつぬるみちをしるへにて（42ウ）
　　おもはぬ山にふみまとふかな137
とありしなからの御手にて御にほひも
さなからなるを見し手ならひの君の心の
中さこそ有けめ御返事にいかにそ
やあきれぬるやうにてかなしと本
には侍るなり
　　そのゝち山ちの露といふ物を人の作り
　　てたつねあひて対面し給へりと作
　　りて侍りそれは又五十四帖の外なれは是
　　にはなし（43オ）
夫生死無常の雲あつく本覚真如の月
出かたし無明の酒にゑひて衣の裏の玉
をしらすおく〳〵万胡にもうけかたき人
界に生るゝ事梵天より糸をおろして

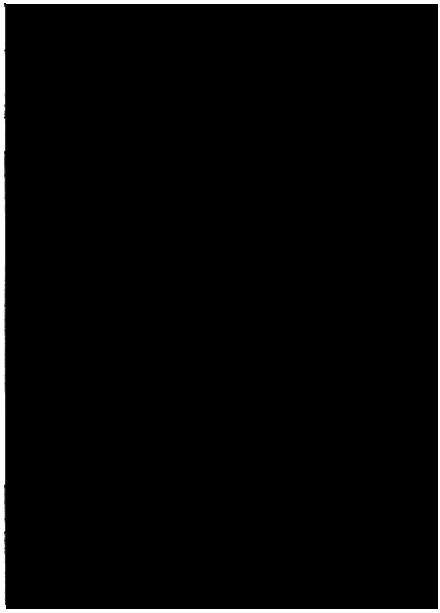
大海の底の針の穴をつらぬくよりも
うけかたし又仏教にあへる事は一眼の亀
の浮木にあへるかことし今かゝる世にあひ
奉る事をは悦はすしてかたちのよき
にふける妄想天たうの花ことはにほたさ
れてあひよくのきつなかたく結ひ解事（43ウ）
更になしされは無常の序の声は耳
に近つけとも世路のいとなみに聞え
す雪山の鳥は日々になけともすみか
を出て忘れぬされは宮もわらやもは
てしなけれはと心をやり衣をすみに
そめをんあひふなうたんの家をいて
きおんにうむゐの心さし深くして真　諸行
実のほうをんしやのすかたなり
無常は天に上る橋　是生滅法はあひよくの
川をわたる舟　生滅々已は剱の山をこゆ（44オ）
る車　寂滅為楽は成佛の間也と覚る
願念の窓の中には心を三明の月にかけ
座禅の床に上には眉に八字の霜をた
れさらんとおもひてはやく世をいとひ
たまふへししからすはかゝる狂言綺語の物語
にたつさはるともしんしつのふかき心
をよくしりなはなとかはさとりをえ
さらん心を直にしてなさけふかけれは
慈悲誠にしてかんなうすへし大和
哥は是五大しよしやうの佛をつくる（44ウ）
なりされはそれにひかれて成佛うた
かひなしといふ也（45オ）
〔絵十〕（45ウ）

付記

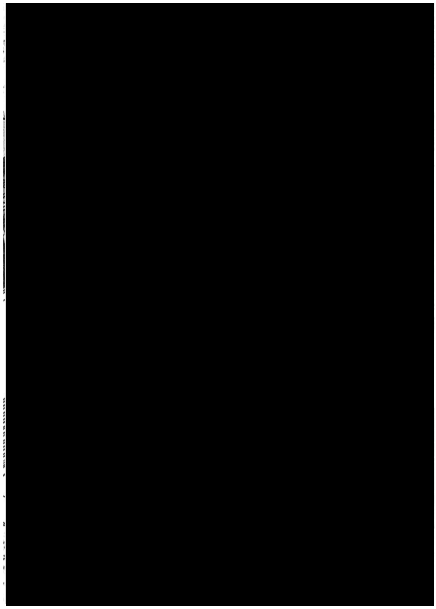
本稿は、平成19～21年度科学研究費補助金（一九五二〇一六三）による研究成果の一部である。



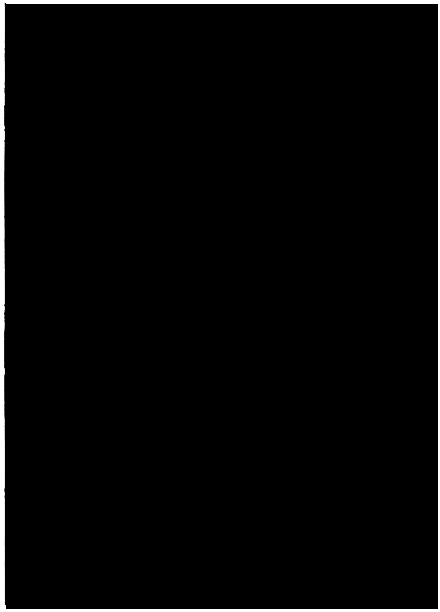
絵二　椎か本　14オ



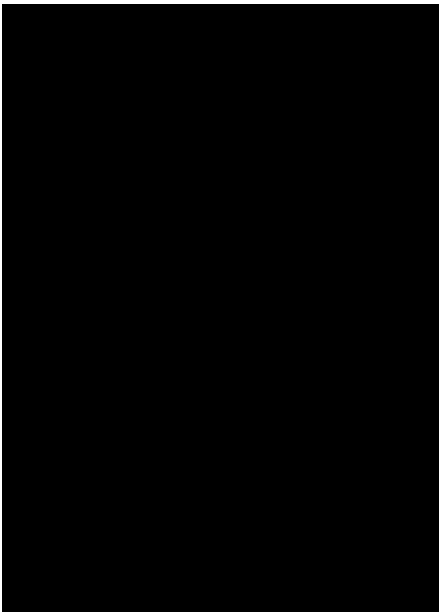
絵一　橋姫　11ウ



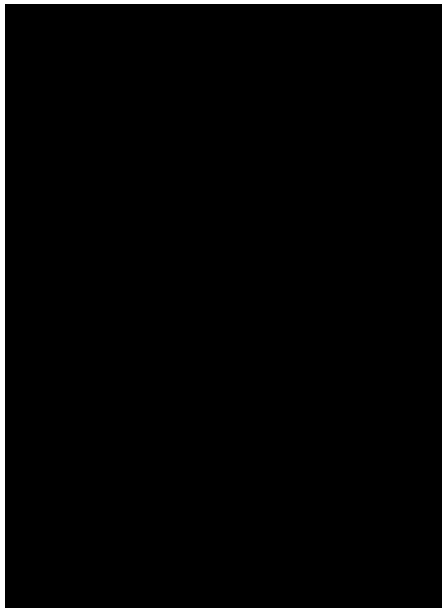
絵四　早蕨　4 ウ



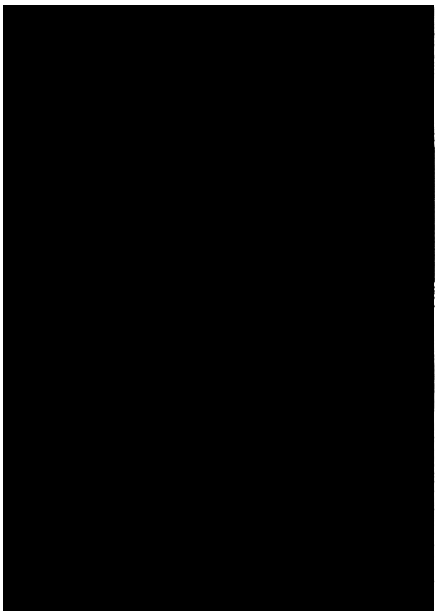
絵三　総角　18ウ



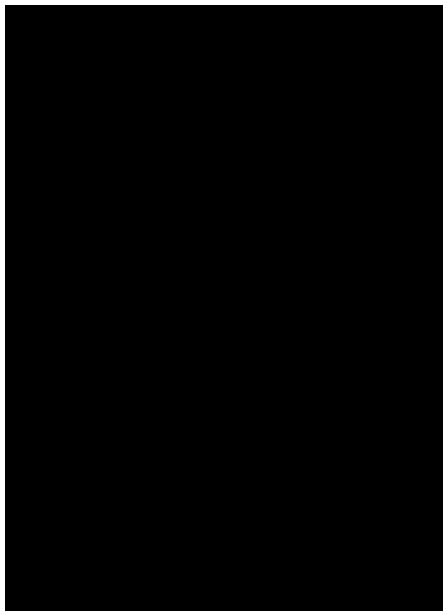
絵六　四阿屋　26ウ



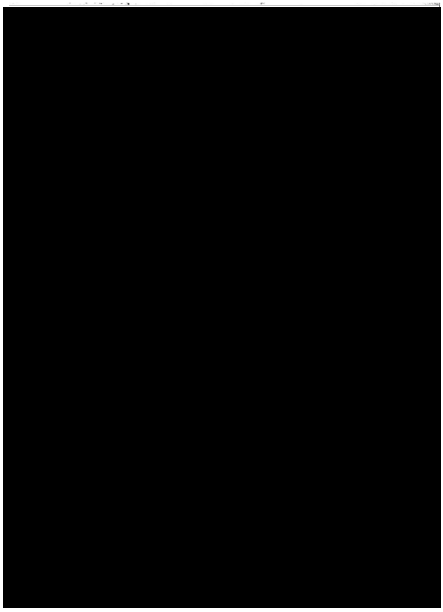
絵五　寄木　24ウ



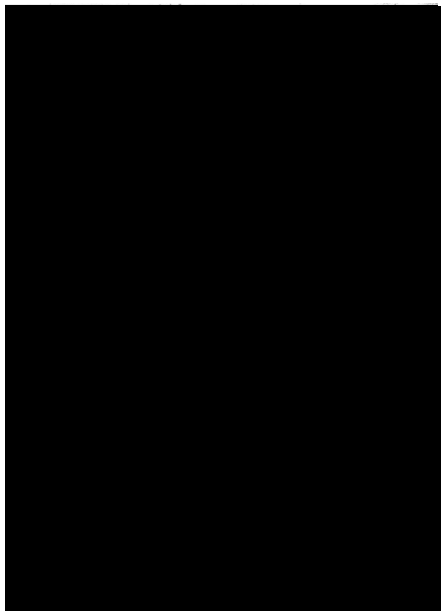
絵八　蜻蛉　37ウ



絵七　浮舟　36オ



絵十　夢浮橋　45ウ



絵九　手習　41ウ